

ベニクラゲムシ



△
クラゲらしくないベニ
クラゲムシ。細い櫛状
の触手が見える

写真の赤く平べったい物体はベニクラゲムシ。これでもクラゲの一員だが、泳がない、いや泳げない不思議なクラゲである。長径は数センチほど。よく見ると白い触手がちよっと伸びている。

ベニクラゲムシを実験室で

久保田 信

52



飼育すると面白いことが起こる。自らの体をいくつかに切り分け、それぞれの小断片は死なずに元の大きさの1個体に成長する。この方法でクロインを増やしていく。

ベニクラゲムシなどのクシクラゲ類は、雌雄同体で卵も精子もつくれるが、自家受精は通常起こさない。子どもはプランクトンで浮遊に適した風船形をしており、まったくおとなの体と違っていている。

20年ほど前、京都大学瀬戸臨海実験所の北浜で、石ころの裏にベニクラゲムシがびたりと張りついていて、これが初めての出会いで、それ以来、

臨海実習で学生たちにユニークなクシクラゲとして紹介してい

る。

ベニクラゲムシは、プラナリアの仲間ヒラムシ類にそっくりである。しかし、石をこす素早く逃げるヒラムシに対して、ベニクラゲムシはじっとしたままだ。この行動の違いですぐに区別がつく。

ベニクラゲムシを持ち帰り、シャーレに入れて静かにしておくと、触手をじわじわ伸ばしてくる。触手は櫛(くし)状で向かい合わせに2本ある。有櫛動物門のトレードマークだ。クシクラゲ類の触手には刺胞の代わりに、とりもち状の細胞の膠胞(こうほう)が、無数に装填(そうてん)されている。運動器官である櫛板は、おとなになると完全になくしてしまう。

最近の16年間、北浜をはじめ実験所周辺の磯浜一帯でベニクラゲムシの姿を全く見掛けなくなった。海水の交換もよく、湾口と違ってきれいなはずだが、何か目に見えぬ環境の変化を、身をもって知らせてくれているのだろうか。

(京都大学准教授)